

## 都立井の頭恩賜公園でのコイ駆除の取組み ～コイ駆除で苦情殺到ってホント?～

内山 香（東京都西部公園緑地事務所）

井の頭池は、東京の郊外、吉祥寺の繁華街に隣接し、年間約 500 万人が訪れる都立井の頭恩賜公園の中心部に位置している。地域のシンボルとして親しまれてきた池の面積は 4.2ha、水量約 6 万トン、神田川の源流にもなっている。かつては日量数万トンもの水が湧き、ムサシトミヨなどの関東平野の固有種や多様な水草等を育てていた。しかし 1960 年代以降、湧水の減少にともなう水質悪化に、外来魚の増加が追い打ちをかけ、豊かだった池の様相は変わり果てた。

その井の頭池で、外来魚防除や水質改善を目的とした市民協働での「かいぼり」が 2014 年から計画的に進められており、2017 年 12 月から 3 回目が行われている。2 回のかいぼり後には、外来魚防除の成果が顕著に現れ始めており、在来種の魚類やエビ類の回復が見られるとともに、池の広い範囲で沈水植物等の生育も確認されている。

本発表では、井の頭池で行われているかいぼりを軸とした外来魚防除活動において、特に来園者から多くの質問を受ける、コイ *Cyprinus carpio* の駆除に関する取組みについて紹介する。

井の頭池では、古くは江戸時代からコイが生息していたことが記されている。また、戦後には“池の名物”であるコイが見られなくなったことへの対応として、公園管理者による 1 万匹もの放流等が行われている。一方、1980 年代に確認されたオオクチバスの侵入とともに、“異常なほど多い”コイの生息状況を懸念する声もあがっていた。とはいえ、透明度の低い濁った池において、コイは唯一視認しやすい魚影として、来園者の鑑賞やエサやりの対象として親しまれてきた。

そうした中、井の頭池の生態系の回復や水質改善を目指し、かいぼりでの外来魚防除活動が本格的に開始された。駆除対象種の選定にあたっては、学術的知見や他地域の事例等も参考にしながら、公園管理者や公園内で活動している地域団体が構成された「井の頭外来生物問題協議会」で話し合われてきた。その結果、1 回目のかいぼりでのコイの処遇は、“色ゴイ”（ニシキゴイ、ヒゴイのほか品種ゴイを含む）と傷病個体については駆除対象とし、それ以外の体色が黒色タイプのコイについては同池内に仕切られた閉鎖水域へと放流された。公園池に生息するコイは外来種もしくは交雑種等の飼育型コイであるという認識はあったものの、最終的には公園管理者によるコイの愛護家への配慮からそうした対応となった。これは、公園池ではコイは観賞価値が高く、姿が見られなくなれば批判や苦情が殺到するのでは？という管理者側の固定観念から生まれた配慮ともいえよう。2 回目以降は、井の頭池における外来魚防除の目的の再確認や、コイによる泥の巻き上げ、底生生物や沈水植物等の生育阻害といった影響の大きさなどを考慮し、公園管理者合意のもと全てのコイを駆除対象種とした。1 回目で残存させた同池内の閉鎖水域に生息していたコイも含めて駆除した。

この様に、処遇に関して方針変更があった中、来園者から寄せられた主な声は以下のとおりである。1 回目のかいぼり時には 217 匹のコイを捕獲し、その内の 169 匹が同池内の閉鎖水域に放

流され、48匹を駆除した。その際、コイに関して寄せられた意見として記録されたものは24件。最も多かったのは、「隣接する閉鎖水域に移したコイを元の池に戻すのか?」というもので17件であった。その他「コイを外来種であるのに保護するのはなぜか」、「次のかいぼりではどうするのか」など、今後のコイの処遇についての質問が多かった。2回目の時は、334匹を捕獲し全数を駆除対象とした。寄せられた意見数としては19件であり、うち9件が「コイも外来種なのですか?知らなかった。」という素朴な質問等であった。次いで6件は「コイはどこへ行ったのか」というものであった。その他にも、「コイに餌をやる楽しみがなくなった。姿が見られなくなったのは残念だ。」という声も来園者との会話の中で聞かれたが、管理者が当初懸念していたような批判や苦情が殺到するような事態にはならなかった。

この背景には、かいぼり期間中を通じて、多くの時間をかけて取り組んできた普及啓発活動が功を奏していると感じている。井の頭池では、コイが与える水質や生態系への影響について、また、かいぼりの意義や外来種対策全般、水生生物の基礎知識等に関する研修を受けて専門的知識を深めた市民ボランティアによる普及啓発活動が池の畔で毎週のように行われている。また、そうした解説活動をより説得力の高いものに行っているのが、近年研究者等により進められてきたDNA解析等による飼育型コイ≠外来種というような研究成果である。また、コイを駆除したことによる目に見える成果を示すことも大変効果的である。井の頭池ではコイ駆除後の池底から、絶滅危惧種Ⅰ類の地域固有種である水草イノカシラフラスコモが59年ぶりに野生復活した。こうした自然再生の成果等も積極的に活用しながら啓発活動を行ってきた。

こうした活動により、コイが水質や生態系に与える影響の大きさだけでなく、井の頭池が抱える課題や取り組みを知り、自然再生を目指す活動に共感する市民が増えてきている。それにより、かつては身近に感じていたコイを駆除しなければならないことへのアレルギー反応も少しずつ抑えられてきていると感じる。

多様な価値観を持つ市民が利用する都市公園の池において、それまで身近な生きものと感じられていたコイの駆除を進めるためには、管理者の外来種対策に対する毅然とした姿勢はもとより、それらを支える科学的根拠やそうした管理方針を来園者へ広く伝え理解を得るための、地道で継続的な普及啓発活動が必要不可欠であると考えている。



かいぼり後の池底で野生復活が確認されたイノカシラフラスコモ（2016年5月）